

特集ワイド

生誕100年

1949(昭和24)年、日本人として初めてノーベル賞に輝いた湯川秀樹博士(1907~81)。23日、その生誕から100年を迎えた。物理学賞受賞の報は戦後の人々に夢を与え、多くの科学者、技術者を育てた。政府の原子力推進運動に祭り上げられたこともあった。その信念は「核武装反対」であり、非核運動に後半生をささげた人だった。

【藤原章生】

湯川秀樹博士

56年1月4日昼下がり、東京。中央公論社の編集者だった森一久さん(81)に湯川博士から電話があった。「森さん。君に言われて委員になったけど、もうやってられないよ」と博士は不満をぶつけた。発足したばかりの総理府原子力委員会のことだ。

会話は元読売新聞社主の正力松太郎国務相の下、5人で構成されていた。国連は53年、アイゼンハワー米大統領(当時)が演説「アトムズ・フォー・ピース」で核の平和利用を呼びかけていた。日本にはまだ抵抗があったが、政界や業界は原子力発電に関心を示していた。原発の先導役だった正力氏は発足会見で「発電用原子炉を米国より導入したい」と発表し、博士を驚かせた。

「原子炉導入は慎重に」という姿勢の博士が怒るのも無理はなかった。「正力が『研究などしなくても外国から炉を輸入すればいい』と言っている。そんなことではおれが入った意味がないじゃないか。大体、君がやれというから……」と湯川博士は電話で森さんを責めた。森さんは四谷の旅館にかけつけた。「先生、発足早々に委員長が気に入らないからと辞めるなんて」「そういう問題(政治家の独走)があるから、委員が必要なんですよ」博士の心は何とか収まり、渋々辞任を思いとどまった。それでも翌57年3月、結局、神経性の胃腸障害で静かに辞任した。

「湯川さんほど諮問委員のような役柄に向かない人はいない。国際的な湯川さんには国家的立場という狭い考えがなかったから、国政に巻き込まれるのが嫌だったのです。原子力工学と彼の専門の素粒子論は直接関係ない。でも、知らないからと他人に任せられる人ではなかった。当時、通産省工業技術院で日本初の原子力担当を務め、後に原子力委員になる伊原義徳さん(82)はそう振り返る。

湯川博士には小学生時代、出し物で演壇に立ちながら、何も言えずに引き下がった苦い経験がある。委員辞任後の63年に発表した「本の中の世界」(岩波新書)にこんな下りがある。

寝耳に水の原子炉導入に怒り

なぜ演壇へ立ったか不思議なのです。いつの間に引き受ける羽目になったのか。私の今日までに人生行路をずっと迎って見ますと、時々そんなことが起こっている。始終なのかも知れませんが、引き受けちゃって、非常に苦しむというのを何度も繰り返して。苦勞性でしかも内気で、断り切れない。ところが一面では非常に几帳面でもあり、始終自分で悩み続けている。馬鹿なことを繰り返してきているのは、何か生まれつき自分の中に非常に根深いそういうものがあって、これが一生つき纏うのではないかと自らを「厭世的」と言う博士

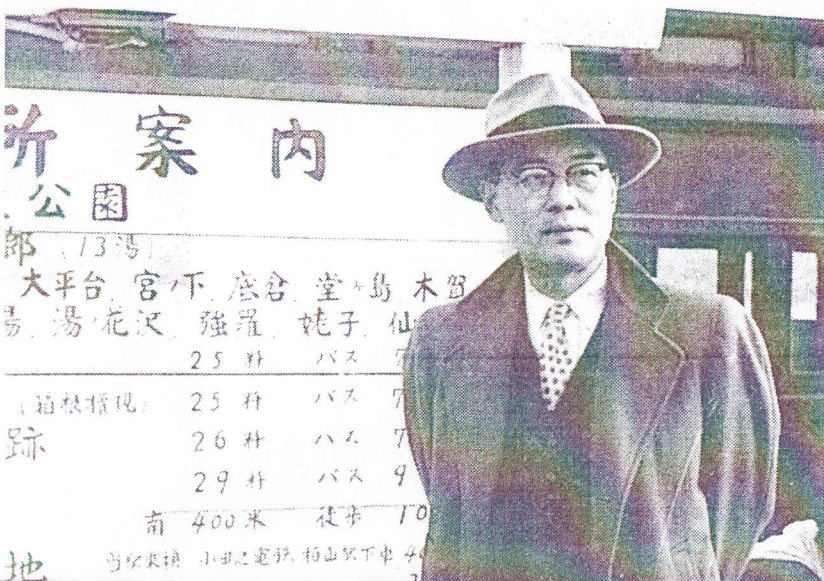


森一久さん

「核武装反対」

日本の「行く末」常に気に留め

士は出家ど、社会のを好る原子内部中間子論実験や心薄い分野位で専攻にある。も後押し事に流さそんな子力委員に踏み込湯川奨学リートさせ立てたとい理人情でい」と伊



をまじめに考えたほ
や人間関係にもまれ
まなかった。27歳で
の挙動を解き明かす
を生み出したのは、
用物理などの興味の
を切り捨て、自分本
を絞り込んだ選択眼
当時の京大の自由さ
したが、簡単には世
れなかった。
湯川さんがなぜ、原
という政治的な世界
んだのか。「読売・
基金」を54年にスタ
た正力元社主の顔を
いう声もあるが、「義
動くような人ではな
原さんたちは否定す



伊原義徳さん

「核なき世界」の実現を信じた



近藤駿介
原子力委員長

る。引き受けたのは森さんの存在が大きい。湯川博士より20歳ほど年下の森さんは京大の教え子の一人。博士は上京の度に森さんを訪ねた。

広島市出身の森さんは被爆者だ。45年8月、身内を市街地から避難させようと帰省した直後に被爆し、両親ら家族5人を一瞬にして失った。「私も倒れたが奇跡的に助かり、翌夏、京大に戻った。すると、湯川先生は本当に驚き喜んでくれた。僕が死んだと思っていたんです」

それから数年後、森さんに「日本の原子力行政を先生が監視しなくては、誰がやるんです」と説得され、湯川博士

の身の上は何が起こるか、その瞬間まで知らずにいることがあるという点においては、未開人とあまり選ぶところがない。学問が進歩すれば何でも予知し得るようになるであらうか▽(散文集「目に見えないもの」―講談社―より)

帰省する教え子の真上に原爆が投下されることを予知できなかった。湯川博士は直接何も語らなかったが、そのことを、そして原爆を生む学問の一端にいた自らの責任を常に感じていた、と森さんは語る。博士はその後、原水爆の危険を警告する「ラッセル・アインシュタイン宣言」への署名(55年)、科学者を集めた反核のパグウォッシュ会議の開催(57年)を経て、戦争をなくすため国家を超えようという世界連邦会議の運動に力を入れていく。

それから半世紀。国家の壁は今も高く、核保有国は増えた。核廃絶は祈りのようにしか響かない。だが、専門家たちは「核軍縮の歩みは決して衰えたわけではない」と語る。

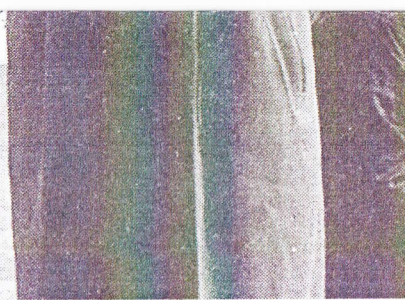
近藤駿介・現原子力委員長は「核不拡散の観点から核物質を世界で管理すべきだ」という思想は今も生きている。最近も濃縮ウランを国際原子力機関(IAEA)が保有し、各国への供給を保証するという構想が話し合われた」と語る。

△現実には痛切である…複雑である。あらゆる早合点は禁物である。それにもかかわらず現実はその根底において、常に簡単な法則にしたがって動いているのである。達人のみがそれを洞察する…われわれ凡人はどうしても現実にとらわれ…現実のように豹変し…不安になる。そして現実の背後に、より広大な真実の世界が横たわっていることに気づかないのである…真実はやがて現実となるのである▽

(同)

「真実」を「核なき世界」に置き換えてみよう。それはいつかかなう。博士はきっとそう信じていたはずだ。

「対」貫く



1958年11月、箱根旅行に行ったときの湯川秀樹博士
(森久さん提供)

博士は29歳の時、未来についてこんな一文を記している。日食の日、実験室で負ったやけどに触れた下りだ。

△未開人は日食があるとか地上にも凶事が起こるだろうと驚き恐れた。われわれはこれを滑稽だと思う…われわれは(日食を)きわめて正確に予知することが出来る。しかしわれわれはしばしば自分